

三浦永理さんの正直のゆくえ

奈良 敏行（笈の定有）

『思わず、涙さん』という本を書き置いて、三浦さんはこの八月鳥取を去った（二〇二五）。九月からはイギリス留學生活が始まる。この本は『とつとり、ひとり』の続編だ。いずれも『音信不通』の掲載文をベースにしているが、この続編には、三十歳になった自分がそれぞれの記事に返信を付けている。

《『本屋のパンセ』は、奈良さんの『音信不通』をまとめたもので、わたしの本はわたしの記事をまとめたものなので、（大それたことをいうが）A面、B面のような役割があるようにも思った。》p.100

大それたどころか、とてもうれしい一言だった。あるひとが三浦さんを、いつか何者かになろうと足踏みしている人、と評した。何者かになったあげくに、「音信不通」の残影が、少しでも存在することとなれば、思いがけない僥倖だ。

『音信不通』に執筆し続けていて、三浦さんは「どこか虚空に向かって書いているような感覚になる。」という。

《「音信不通」という一般名詞が示すのは、コミュニケーションの断絶だ。わたしはどこかそこに「さよなら」を感じ取っていて、そんなことばかり最初書いていた節がある。》p.135

「コミュニケーションの断絶」から始まる物語はわたしと共有するメロディだ。わたしのオブセッションは伝わることを期待しない。他者は「空虚」だ。三浦さんは「傷ついた思い」を正直に人に告げると、場面を共有したはずの人に「だつて何もなかったでしょう」p.16と無視される。三浦さんは「小さい頃の私は『言葉が遅い』子どもだった。」p.28と原点を語る。「頭の中の思いと言葉が直結しないのだ。」かくて三浦さんのオブセッションは「言葉を尽くさなくてはいけない」p.20という狭い希望に焦点を合わせていく。

イギリス行きの三浦さんの何度目かの転身は、どのような幸いを用意するのだろうか。わたしの三十歳の転身は本屋を開業することだった。それも青春の日々を投企した『定有』という雑誌の誌名を店名にしたものだった。三浦さんにシンクロすれば、それは「たった一人の人間に過ぎないのだから」ということと同義だ。

三浦さんの本は入手したその夜に一気に読み上げた。自分の二十代が甦るような気がした。ページを閉じてふと見

上げる書棚に一冊の詩集が目に入った。眠れないままにページを繰った。

《観念によって支えられない生のヴィジョンというものを想像することが出来るだろうか》P.11

《石の中に眼がある。憂愁と倦怠にとぎされた眼がある》

P.10

《危機はわたしの属性である》

三浦さんはときどき「石」になる。石になると、エクソフォニー（母語の外に出た状態）として外部に生きることを選択する。齟齬を抱いたあげく、いつそ言葉が通じない側で生きること、超越すること、これが三浦さんのオブセッションだ。

ときおり「石」となる三浦さんは、結局どこにいても「ひとり」だ。わたしは三浦さんに何回か本をすすめたことがある。その一冊に『村に火をつけ、白痴になれ、伊藤野枝伝』があった。普通こんな本は人にすすめない。しかし会話しているときこの本が必要だと思った。後に三浦さんは「彼女は徹底的に強く、徹底的に独りだったように思える」と記す。大勢と群れて生きるのは虚妄で「ひとりきりの一個体」だということの確認がそこにあったかもしれない。

異邦人として生き続ける、三浦さんのゴールを見届ける

のに、十分な時間はわたしにはない。

《そもそも鳥取の五年間が次に向かう場所を探す「あわい」の時間で、だからこそ、浮き草の様に漂って生きていたのかもしれない。》

大事なのは「あわい」の時間だったのだろうか。わたしの最後の十五年は「音信不通」という「あわい」の時を刻みながら、しかし何処へも移動することなく「ここ」にあり続けることを選択した。

「ひとり」の三浦さんを鼓舞する言葉はあるだろうか。詩人はいう。

《坂をのぼる いまは一心に風に堪え 抵抗を噴（みつ）めて坂をのぼる 振り返ったらそれまでだ 私の痕跡よもう一人の私よ ついて来い 何処までも私に付いてこい》P.55

「もう一人の私よ ついて来い」、自分の頭の中に反響し続けていた言葉だが、そうかこの詩集の中にあつたのかと気が付いた。

「ひとり」、それが三浦さんの正直のゆくえなのかもしれない。

三浦永理『ひとり』2024

2025.08.04

三浦永理『思わず、涙さん』2025

現代詩文庫『田村隆一詩集』思潮社1968